

I サムエル 26 章「主に逆らうことはあり得ない～主への信頼の告白」

24 章に記されているエン・ゲディの洞穴での出来事と似ていることがこの章でも繰り返されています。そこにはサウルの精神状態が表されており、そのサウルに追われている中であっても、ダビデの主を恐れる敬虔さが続いていることを表しています。そして、ダビデは主への信頼を告白しました。

1. 再び訪れた機会に (: 1~12)

サウルは、エン・ゲディの洞穴での出来事の際には、ダビデが自分に良いことをしてくれたと言いました。けれども、時間が経つうちに、あれこれ思い起こし、自己中心な考えに凝り固まり、精神状態が悪化したのではないのでしょうか。

そんな時にダビデに関する情報が届きました。ジフ人がやって来て、「ダビデはエシモンのあるハキラの丘に隠れているのではないのでしょうか」と告げました。サウルはすぐに出発し、ダビデを捜そうとしました。再び三千人の精鋭を率いてジフの荒野に下って行きました。罪人の状態は変わらないことが分かります。真実に主に立ち返らないと、そして主によって変えられないと人は変わらないのです。

サウルは情報に従ってハキラの丘にやって来て、陣を敷きました。一方、ダビデは偵察を送って、それを確認し、自ら夜にやって来て、サウルとその軍の長アブネルが寝ている場所を見つけました。ダビデとアビシャイは二人で夜に、サウルの陣営に忍び込みました。そして、サウルが寝ているところに入って行きました。サウルの枕もとの地面には槍が突き刺してあります。サウルが自分の身を守るためのものですが、その状況を見て、アビシャイがダビデに言います。8 節。

兵たちもサウルも皆寝込んでいる状況を、神が与えてくださったチャンスだということです。しかし、ダビデは答えます。9 節。サウルは「敵」ではなく「主に油注がれた方」だと言います。ダビデの態度は変わりません。自分とサウルの間の問題ではなく、主の御前での自分の態度が大事だということです。

ここでは 24 章では言っていなかったことも言います。10 節。「主は必ず彼を打たれる」という確信は、25 章のナバルの死からダビデが学んだのでしょうか。主が正しくさばかれ、復讐されるという教訓を学びました。だから、自分が手を下すことで、主のみこころを手っ取り早く実現していくなどという不遜な思いを持ちません。真実な主に信頼します。生きておられる主がなさるお取り扱いに委ねるのです。

特に、サウルは「主に油注がれた方」ですから、その方に手を下すなど、絶対にあり得ないことだとダビデは言います。この主を恐れる信仰の態度はこの時のダビデの中で揺らぐことはありませんでした。

主に委ねるべきことでも、自分が行動したほうが早いと思うような状況になったとき、私たちはどうでしょうか。一度目の機会は主に対する信頼によって退けたことでも、また再び同じような機会が与えられたときに、どう思うでしょうか。これはやはり主が促しておられるのではないかと勝手に思うかもしれません。委ねるよりも、自分が行動するほうが手っ取り早し、安心できると思うかもしれません。

しかし、ダビデが主を前にして、主を恐れて、主がなさるお取り扱いに委ねていたように、私たちもそのような信仰の態度を持つようにと教えられます。

ダビデはアビシャイを抑えて、でも証拠として槍と水差しを取って出て行きます。その間、誰も見ず、誰も気づかず、誰も目を覚ましませんでした。「主が彼らを深い眠りに陥れられた」とあります。主が介入され、みわざを行っておられたのです。

主はみこころに従おうとする者を確かに助けてくださり、みわざを行われるのです。その主のみわざを信仰によって受け止めたいと思います。

2. ダビデのことば (: 13~25)

さて、サウルの陣営から出て行ったダビデは、谷を渡り、反対側の山の頂上に立ちました。そして、遠く離れたその所から大声で叫びました。14 節。兵たちと軍の長アブネルに呼びかけたので、「アブネル、返事をしないのか」とは、サウル軍の代表に対する呼びかけであり、それはサウル王に対する呼びかけを意味しています。だからアブネルは「王を呼びつけるお前はだれだ」と答えました。

ダビデは続けます。15～16節。王を護衛していなかったと非難しています。アブネルはサウルの枕もとを確認したでしょう。そして、槍と水差しがなくなっていることを知り、何も言えなかったでしょう。

サウルはその遠くから聞こえる声がダビデの声であることに気づいて、「わが子ダビデよ、これはおまえの声ではないか」と問います。ダビデは答えて、なぜ自分を追うのですかと尋ねます。ここでも「わが君、王様」と呼んで、主に油注がれた者に対する敬意を保っています。自分にはサウルに対して何の悪もないと訴えます。

そして、自分に敵対するようにサウルに誘いかけたのが主であれば、あるいは人であれば、と想定して、それぞれの場合について語ります。もしダビデに敵対することが主から出ているのであれば、「主がささげ物を受け入れられますように」と言います。これは、ささげ物を献げることで主が自分をあわれんでくださるようということです。

その一方で、もしダビデに敵対するようにとの誘いが人から出ているのであれば、「その人たちが主の前でのろわれますように」と言います。その理由は彼らがダビデを「追い払って、主のゆずりの地にあずからせず、『行って、ほかの神々に仕えよ』と言っているから」ということです。いのちを狙われて、ダビデが仕方なくほかの土地に逃げて行くなれば、主から与えられている相続地を捨てることとなります。それはイスラエルと契約を結び、相続地を与えてくださっている神、主を捨てさせる罪です。その罪を犯す者は主の前に呪われなければなりません。

そして、そのような主の前で呪われるようなことをイスラエルの王サウルが行っていると言います。「イスラエルの王が、山でしゃこを追うように、一匹の蚤を狙って出て来ておられるのですから」と言います。自分のような小さい者を追っても意味がないと言うのです。

ここまでのダビデのことばを聞いてサウルは言います。21節。サウルはダビデが一度ならず二度までも、いのちを取ることができた機会を用いず、自分を尊んでくれたことに感動して、このように言いました。心を入れ替えたかのようなことばです。しかし賢明なことに、ダビデはサウルのことばを信用しません。一時的な心の動きだと受け止めています。それでサウルのところに自ら行くことはしないで、王の槍を取りに若者を一人よこしてくださいと言います。

そして、ダビデは主への信頼を告白します。23～24節。「主は一人ひとりに、その人の正しさと真実に応じて報いてくださいます」と言い、自分が「主に油注がれた方」サウルのいのちを大切にしたこと、主が報いてくださると信頼しています。「主は私のいのちを大切にしてくださいます、すべての苦難から私を救い出してください」と主への信頼を告白しています。

詩篇40:10。このように主への信頼をことばで言い表し、人々に証しすることは、私たちが学ぶ必要があります。私たちが歩みの中で神、主の義と真実を信頼したことがあったでしょう。生活の中で主の恵みとまことを受けとめて証ししたことがあるでしょう。自分を誇ることはありません。主がほめたたえられるのです。私たちが主への信頼を言い表していきたいと思えます。

ダビデのように苦難の中でも告白し、証しすることができるはずですが、ダビデはサウルに追われている中でも主への信頼によって歩むことができました。そのことは試練が信仰者にとってどれほど恵みであることを示しているのではないのでしょうか。神様は人を選んで試練を与えておられます。しかし、選ばれた人自身が強いわけではありません。ダビデはアビガイルによって罪を犯さないようにとどめられたことがありました。試練の中で、人は自分の弱さに気づかされると共に、主の確かな恵みを体験していくのです。その恵みを証ししていきたいと思えます。

ダビデは、サウルに手を下すチャンスと思えるような機会が再び訪れても、主を恐れる信仰の態度を保っていました。主がなさるさばきに委ね、自分は主に逆らうことは絶対にあり得ないと言いました。私たちが、主を前にして、主を恐れて、主に委ねる信仰の態度を与えられ、保っていたいと教えられます。

また、ダビデは試練の中でも、主の正しさと真実を信頼し、その信頼をことばで言い表しました。私たちが、主への信頼を言い表すことができるように教えられます。試練の中でも、いや試練の中だからこそ、主の恵みをいただくのですから、それを証ししたいと教えられます。